

鹿沼ゆかりの児童文学作家

ちばしょうぞう

千葉省三

その生涯と作品



大正から昭和初期に活躍した児童文学作家である千葉省三は、現在の鹿沼市で幼少期から青年期を過ごし、その体験を基に多くの郷土童話を発表しました。それらの作品は、鹿沼の方言を使って子どもたちのいきいきとした姿を描き出し、土のおいこのする作品と呼ばれ、日本の近代リアリズム児童文学の先駆的な作品として、高く評価されています。

省三が育った鹿沼市楡木町には、ご遺族から寄贈された原稿や遺品等をもとに「千葉省三記念館」が設置され、省三の作品や児童文学に関心のある多くの方々から全国から訪れています。ここでは、省三の生涯と作品についてご紹介したいと思います。

生い立ち

千葉省三は、明治 25 年（1892）12 月 12 日（11 月 27 日説もある）、父亀五郎、母ハマの長男として、母の実家である栃木県河内郡篠井村（現在の宇都宮市篠井町）に生まれました。父親の亀五郎は教師で、当時は篠井村の下小池尋常小学校に勤務していました。

明治 27 年（1894）、亀五郎は上都賀郡今市町吉沢（現在の日光市吉沢）の吉沢尋常小学校の校長になり、一家も同校の校長住宅に移りました。



父 亀五郎



吉沢小学校（昭和 42 年撮影）

例幣使街道の杉並木のそばにあった学校周辺で省三は、弟の芳男と遊んでいました。このころの記憶を基に「炭焼きごっこ」などの作品が後に生まれます。また、父が今市の書店で買ってくる「日本お伽噺」、「アラビアンナイト」などを読んで、本の面白さに目覚めたのもこの頃でした。

省三は明治 31 年（1899）に 2 年生の編入試験を受け、1 年生を飛び越えて同校の 2 年に入学しました。以後、省三は同級生よりも 2 歳年下となります。

明治 32 年（1899）10 月、亀五郎は上都賀郡南押原村大字楡木（現在の鹿沼市楡木町）の楡木尋常小学校の校長になり、一家は楡木へ転居しました。



明治 30 年頃

左から芳男・ハマ・寛・省三

1. 楡木の子ども時代

省三一家は、吉沢から楡木まで十数頭もの馬車に荷物を積んで向かい、楡木尋常小学校の校長住宅に引っ越しました。この時の記憶を基に、後に「乗合馬車」という作品が生まれました。

当時の小学校校舎は、宇都宮街道と例幣使街道の交差点の西側にあり、観音寺というお寺の跡でした。街道沿いにあった村役場の裏側で、板葺の長屋のような建物だったといいます。

楡木は例幣使街道と日光道中壬生通りの交差する宿場町で、街道の両側には宿屋や問屋をはじめ、各種商店が軒を並べていました。街道の家々の裏側には竹やぶがあり、子どもたちの格好の遊び場になっていました。省三と芳男も、すぐに宿の子どもたちと仲よくなり、宿の内外で遊びまわりました。このころの体験が、後の「郷土童話」と呼ばれる作品で生き生きとえがかれることとなります。また、当時の友だちの姿は、作品の中に登場する子どもたちのモデルになっています。



明治 35 年 2 月 省三・ハマ・芳男



南押原高等小学校跡の碑

明治 34 年（1901）4 月、省三は南押原高等小学校に進学しました。同校は南押原村大字磯（現在の鹿沼市磯町）にあり、当時は民家を利用した仮校舎でした。（現在の磯駐在所裏に記念碑があります）後に、この校舎を舞台に「仁兵衛学校」という作品が生まれています。

同校は、省三が 4 年生の時、現在の南押原中学校の場所に校舎を新築し、移転しました。こちらの校舎を舞台にして「けんか」「井戸」といった作品が後に生まれています。

省三は同級生よりも 2 歳年下だったため、体が小さく運動は苦手で、級友から「豆省」とからかわれましたが、勉強は得意で成績はいつもトップクラスでした。

3. ^{はんだりょうへい}半田良平との出会い

明治 38 年（1905）4 月、省三は県立宇都宮中学校（現在の県立宇都宮高等学校）へ進学しました。学校は河内郡姿川村大字鶴田（現在の宇都宮市滝の原）にあり、省三は姿川村の農家に下宿して通学しました。

省三は 1 年生の秋に 1、2 年生の修学旅行で日光に行き、その紀行文「修学旅行記」が同校の『同窓会雑誌』第 17 号に掲載されました。この時、雑誌の筆頭幹事を務めていたのが 5 年生の半田良平でした。半田良平は上都賀郡北犬飼村大字深津（現在の鹿沼市深津）出身で、後に東京帝国大学英文科を卒業後、^{くぼたうつほ}窪田空穂に師事して歌人として大成し、雑誌『国民文学』の創刊にかかわるなど、大きな功績を残しました。



半田良平（旧制高校時代）



明治 39 年 中学時代の省三（中央）

半田良平は、同じ上都賀郡の後輩である省三の文才を認め、学年を超えた友情で結ばれるようになりました。二人は他の文学仲間と共に同人誌『ひらめき会回覧雑誌』（内容は短歌やその批評など）を発行するなど、良平が中学校を卒業した後も交流が続きました。また、当時の宇都宮中学校の校長は、文学者・歴史学者としても著名な笹川種郎（臨風）で、その影響も大きかったと思われています。

中学時代の省三は、柔道部に入部するなどして体力をつけました。そして旧制高等学校への進学を希望し、将来は政治家になることを夢見ましたが、悪性の盲腸炎にかかり、進学を断念せざるを得ませんでした。

4. 代用教員～上京

明治43年（1910）3月に宇都宮中学校を卒業した省三は、体も回復した12月、父が校長を務める母校榎木尋常小学校の代用教員に就職しました。同校は前年の明治42年（1909）11月に現在の榎木小学校の場所に新築移転し、校長住宅もあわせて敷地内に新築移転していました。

省三は「代用先生」と呼ばれ（父の亀五郎は「大先生」と呼ばれていました）、綴り方の指導や子どもたちへの本の読み聞かせ等に熱心に行っていたようです。翌明治44年（1911）9月、省三は磯尋常小学校（現在の南押原小学校）へ転任し、毎日2キロの道を歩いて通勤しました。

大正3年（1914）4月、栃木女子師範学校を卒業した増淵貞子が磯尋常小学校に教員として赴任しました。省三は貞子と恋愛関係になりましたが、その数か月後、省三は代用教員の職を辞して上京しました。



省三 25歳（大正5年）

出版社に就職して小説家になる夢をかなえるためでした。先に上京していた半田良平を頼っての行動であり、良平の紹介で日月社という出版社に就職しました。しかし同社は年末に倒産し、続いて就職した植竹書院も1年以内に倒産してしまいました。



貞子（大正6年）

増淵貞子とは、上京後も文通などで交際を続け、大正6年（1917）5月、良平夫妻の媒酌で結婚し、画家の^{よるす}萬鉄五郎の紹介で児童向け出版社の「コドモ社」へ入社しました。そして翌年4月、貞子は退職して上京し、省三夫妻は大塚窪町（現在の文京区大塚）に所帯を持つことができました。

5. コドモ社時代

省三が入社したコドモ社は東京市小石川にあり、絵雑誌『コドモ』、幼年雑誌『良友』を発行していました。省三は『コドモ』の編集者として採用されました。大正7年（1918）、中村勇太郎に代わって『良友』の編集担当となった

浜田広介（後に児童文学作家として「泣いた赤鬼」等を発表する）にすすめられ、省三も同誌で処女作となる童話「かくれ岩」を発表しました。



大正7年10月27日 コドモ社編集室で
左から2人目省三、右端川上四郎、後列中央が社主の木元平太郎

この年7月、鈴木三重吉によって童話童謡雑誌『赤い鳥』が創刊され、続いて『おとぎの世界』『金の船』といった雑誌が次々に創刊され、童話童謡運動が急速に盛り上がってきました。コドモ社でも同種の雑誌を創刊することになり、大正9年（1920）4月、省三を編集長として雑誌『童話』が創刊されました。

省三は雑誌の方針として、「創作童話を載せること」、「新人の発掘につとめること」、「日本の

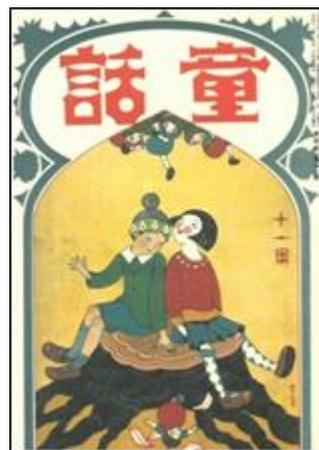
土に生まれた郷土性のある作品を尊重すること」を掲げ、編集に当たりました。

創刊号は80頁、20銭の定価で、相馬泰三、浜田広介、北村寿夫、沖野岩三郎、松村英一らの作品が掲載され、



川上四郎のアトリエで 左四郎、右省三

省三自身も童話「砂漠の宝」を執筆したほか、投稿童話や綴り方の選者をつとめていました。口絵を描いた川上四郎



は、7月号から表紙絵と口絵を手掛け、応募図画の選者を担当するなど、省三と共に雑誌づくりの中心となっていました。二人は大正11年（1922）に上荻窪に共に転居し、隣に住んで家族ぐるみの付き合いを続けました。

省三は童謡にも力を入れ、藤森秀夫や西条八十を選者に迎えました。特に西条は、大正期の新童謡運動の一角を『赤い鳥』の北原白秋、『金の船』の野口雨情と共に担うことになりました。また、『童話』の投稿者

からは多くの新人が輩出しています。童話では関英雄、奈街三郎、柴野民三らが、童謡では島田忠夫、金子みすゞ、茶木滋らがこの雑誌から巣立っています。省三自身も毎号のように作品を発表しています。郷土童話の「拾った神様」「炭焼きごっこ」「ばけねこたいじ」、空想童話の「五右衛門風」「機関車と月の話」、幼年童話の「ワンワンのお話」「チックタック」などが、この時期の作品です。



大正 10 年コドモ社 10 周年祝賀会
前列左から 4 人目省三、5 人目西条八十
後列右から 3 人目岡本一平、5 人目河目悌二

6. 児童文学作家として活躍

大正 12 年（1923）11 月、省三はコドモ社を退社し、執筆活動に専念することになりました。作品は引き続き『童話』『良友』等に発表しました。そして大正 14 年（1925）の『童話』9・10 月号に発表したのが、代表作「虎ちゃんの日記」です。この作品は、「土のにおいのする」郷土童話の完成形を示した作品で、後に近代リアリズム児童文学の最初の作品と、高く評価されるようになります。

ところが大正 15 年（1926）7 月、雑誌『童話』は廃刊になってしまいました。同じころ『金の星』や『赤い鳥』も苦境に陥っており、大正期に繁栄した童話童謡運動は終わりの時期を迎えていました。



『童話文学』愛好者のつどい

作品発表の場を失った省三は、昭和 2 年（1927）、酒井朝彦、北村寿夫、水谷まさるの 4 人で同人誌『童話文学』を創刊しました。創刊号は 32 頁、定価 25 銭で、省三の代表作のひとつである「鷹の巣とり」「どろぼうとラッパ」のほか、小川未明等が寄稿しています。『童話文学』は昭和 6 年（1931）に廃刊になるまで 36 冊が発行されています。

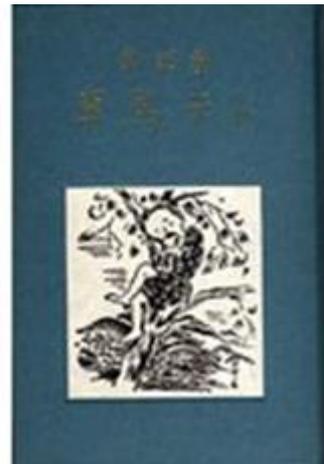
この頃、省三は雑誌に掲載された作品を単行本として発売しています。

昭和 4 年（1929）には郷土童話を集めた初の単行本である「トテ馬車」（古今

書院) と、幼年童話を集めた「ワンワンものがたり」(金欄社) が発売されました。郷土童話集は、この後「葱坊主」(古今書院・昭和7年)、「地藏さま」(古今書院・昭和7年)、「竹やぶ」(古今書院・昭和13年) も発売されています。

同人誌の執筆では生活が苦しくなったため、省三は講談社の雑誌『少女倶楽部』からの依頼で長編小説を執筆することになりました。

昭和7年(1932)1月号から同誌に「陸奥の嵐」の連載が始まりました。連載は1年間にわたり、好評を博したため、続いて「海の隼」「千鳥笛」「山姫かづら」「泣かぬ星丸」「勤皇兄弟」が連載され、後に単行本化されています。



「トテ馬車」初版本



昭和6年「陸奥の嵐」連載記念

これらは従来の郷土童話とは異なる少年少女向けの長編小説でした。

『童話文学』の廃刊から4年後の昭和10年(1935)11月、省三は酒井朝彦、伊藤貴麿・稲垣足穂の4人で同人誌『児童文学』を創刊しました。同誌には「みち」など5編の省三作品が掲載されたほか、小川未明や坪田譲治らの作品も掲載されましたが、昭和12年(1937)3月に17号で廃刊になりました。

同じころ、講談社の絵本作りにも力を入れるようになり、昭和12年(1937)から17年(1942)までの間に、「金太郎」「孝女白菊」「一寸法師」「二宮金次郎」「安寿姫と厨子王丸」などの文章を手掛けています。なお、作品の発表舞台は、講談社の『幼年倶楽部』『少女倶楽部』が中心になりました。

また、世界の名作の翻案も手掛け、「西遊記物語」「小公子」「ニルスの冒険」などが刊行されています。

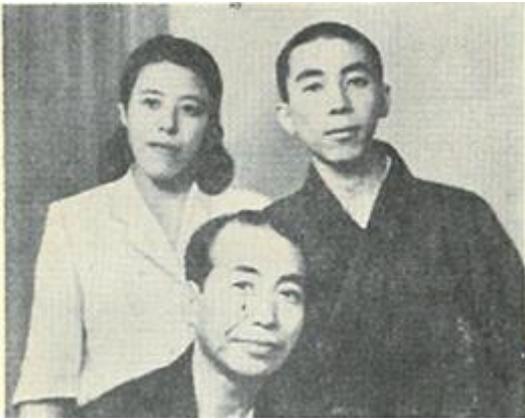


講談社の絵本「安寿姫と厨子王丸」

7. 疎開と断筆

昭和 18 年（1943）4 月、省三は空襲を避けるため、新潟県南魚沼郡湯沢村（現在の新潟県南魚沼郡湯沢町）に疎開しました。そして、この頃から執筆活動をほとんど止めてしまいました。

断筆の理由についてははっきりと書き残されていませんが、戦時色が濃くなる中で、戦意を高揚するような国策文学が求められるようになり、子どもたちがのびのびと遊ぶ姿を描く省三の文学が、次第に居場所を失っていったことが大きかったと思われます。省三は戦意を高揚するような作品を書くことを拒み、筆を断ったと思われます。



昭和 24 年頃 新潟時代
(省三・後列は娘まさ子・息子寛)

翌昭和 19 年（1944）、家族も新潟県中蒲原郡亀田町（現在の新潟県新潟市江南区亀田）に疎開し、後に新潟市内に転居し、疎開生活は戦後まで続きました。この頃省三は軽い脳卒中を患い、その後遺症から長時間机に向かうことができなくなり、執筆活動はさらに少なくなりました。戦後に発表した作品は、『幼年倶楽部』（昭和 23 年に『幼年クラブ』に改題）に数編を発表したのみでした。坪田譲治や小川未明、浜田広介など、大正から昭和期の児童文

学作家たちが戦後も作品を発表して活躍を続けたのに対して、省三は忘れられた存在になっていきました。

8. 戦後の再評価

昭和 33 年（1958）、省三一家は東京都北多摩郡小平町（現在の東京都小平市）に転居し、翌年同町の学園東区（現在の小平市学園東町）に新居を建て転居しました。この頃から省三文学に対する再評価の聲が高まるようになります。

児童文学作家・評論家の古田足日は、昭和 32 年（1957）の『文学教育基礎講座 1』（明治図書）で「虎ちゃんの日記」について「説話的な骨組みからはなれて、少年小説に近いものがある」と高く評価しました。また、昭和 35 年（1960）に発刊された『子どもと文学』（中央公論社）では、従来評価の高かった小川未明、坪田譲治、浜田広介を否定的に評価し、宮沢賢治、新美南吉、千葉省三を肯定的に評価しました。同書で鈴木晋一は、「日本の児童文学にはじめて生き生きとした子どもたちを登場させた作家は、千葉省三だったろうと思います。」と

高く評価しています。

同年には、『新日本少年少女文学全集』（ポプラ社）が出版され、その 28 巻が千葉県三作品でした。また、岩波少年文庫から「虎ちゃんの日記」も同年に



昭和 42 年 5 月 10 日 第 2 回児童文化賞受賞式

出版され、子どもたちが手軽に省三作品を読めるようになりました。

また、昭和 40 年（1965）には、「チックタック」が「チックとタック」と改題され、光村図書（現 小学館）の小学一年国語教科書に採用され、戦後の子どもたちにも省三作品が届けられることになりました。

こうした再評価の声を受け、昭和 42 年（1967）には長年の児童文学への功績により、第 2

回児童文化賞（モービル石油主宰）を受賞しました。そして翌 43 年（1968）には『千葉県三童話全集』全 6 巻が岩崎書店から出版され、省三の児童文学の全貌を容易に知ることができるようになりました。この全集は、第 15 回サンケイ児童出版文化賞の大賞を受賞しています。

再評価の聲が高まる中、昭和 43 年（1968）9 月 30 日、省三は雑誌『童話』の投稿者仲間による「虎ちゃん会」の面々（関英雄、柴野民三、奈街三郎、平林武雄、茶木滋、小西正保）ら



昭和 43 年 9 月 30 日 楡木小学校校門前で



千葉県三の墓所

とともに、母校楡木小学校を訪問しました。楡木では、共に遊んだ旧友や教え子たちと再会し、児童を前に講話をしています。

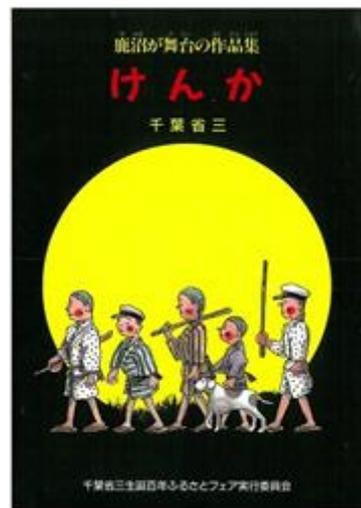
昭和 50 年（1975）10 月 13 日、省三は心不全により 82 歳で亡くなりました。墓地は八王子市の上川霊園にあります。

9. 鹿沼と省三

省三の没後3年目の昭和53年(1978)10月10日、「虎ちゃん会」主催による「第1回千葉県省三忌」が上川霊園で開催されました。翌年から「虎ちゃん忌」と称して毎年開催されましたが、昭和55年(1980)の第3回は、鹿沼市で開催されました。「虎ちゃん会」と「河鹿の会」(日本児童文学者協会鹿沼支部)の共催によるもので、省三作品の舞台となった場所の探訪などを行いました。

昭和60年(1985)には、「虎ちゃん忌」が栃木会館で開催され、劇団らくりん座による「鷹の巣とり」を脚色した劇が上演されました。

平成4年(1992)は、省三の生誕100年にあたるため、鹿沼市で「千葉県三生誕100年ふるさとフェア」が開催されました。11月27日には鹿沼市民文化センターで「愛好者の集い」と「子どもの集い」が開催され、「愛好者の集い」では、関英雄氏、浜野卓也氏の講演が、「子どもの集い」では人形劇や影絵による省三作品の上演や、中央小学校児童による演劇「鷹の巣とり」などが行われました。また、ゆかりの地を巡る「ふるさとツアー」や、省三の遺族から鹿沼市に寄贈された作品や遺品の展示も行われました。さらに、『鹿沼が舞台の作品集 けんか』も発行されました。



千葉県省三記念館(旧)内部

前述のように、この生誕100年記念事業を契機に遺品や原稿・作品等が鹿沼市に寄贈されました。これらを収蔵・展示する施設として、平成5年(1993)11月、榆木町の南押原児童館に併設される形で千葉県省三記念館が開館しました。建物は、省三の教え子でもある福島充氏が私財を投じて建設したものでした。

鹿沼では母校の榆木小学校で省三作品の影絵や紙芝居などを活用した子どもたちへの作品の普及と特色ある学校づくりが進められているほか、鹿沼市立図書館の「本を読むこどものつどい」で千葉県省三について取り上げるなど、郷土ゆかりの児童文学作家として千葉県三とその作品の普及と活用が続けられています。



平成 24 年 12 月生誕 120 年のつどい

平成 24 年（2012）12 月には、生誕 120 年記念事業が開催されました。鹿沼市民文化センターでは「生誕 120 年のつどい」が行われ、宇都宮市在住の児童文学作家高橋秀雄氏の講演や、人形劇と影絵の上演、プラネタリウムで見る紙芝居、クイズラリーなどが行われました。

これを機に千葉県三記念館のリニューアルの機運が高まり、同じ時期に鹿沼市南押原コミュニティセ

ンターの改築が計画されたことから、記念館を施設内に新築移転することになり、平成 27 年（2015）10 月、新築された南押原コミュニティセンター内に新しい記念館が開館しました。

それまでの記念館が平日のみ開館の無人施設だったのに対し、新しい記念館は休日も管理運営協議会による自主開館がおこなわれる無休の施設となりました。また、図書室や学習室も備えた多目的に活用できる施設になっており、管理運営協議会を中心に毎月 1 回の「おはなし会」が行われるなど、千葉県三を核としたまちづくりが進められています。

今後は生誕祭の開催、千葉県三記念文学賞の設立などを検討しています。



新しい記念館展示室



新しい記念館入口

【参考図書】

「永遠の児童文学作家 千葉県三の生涯と作品」安野静治 2001 年

「かぬま 歴史と文化 第 6 号」鹿沼市史編さん委員会

「千葉県三童話全集」1967 年 岩崎書店

「鹿沼が舞台の作品集 けんか」1992 年 千葉県三生誕百年ふるさとフェア実行委員会 ほか

千葉省三の作品について

千葉省三は、その生涯で約 300 編の作品を発表しています。最も多いのは、自らが編集した雑誌「童話」や「良友」、そして同人誌「童話文学」「児童文学」に発表したものです。また、講談社の子ども向け雑誌「少女倶楽部」「幼年倶楽部」などに書き下ろしたものがこれに次ぎ、さらに単行本として書き下ろされた作品も数多くあります。

代表的な作品は、『千葉省三童話全集』（全六巻・岩崎書店・昭和 43 年）や各種単行本に収録されていますが、残念ながら、全集をはじめとしてほとんどの単行本が現在では絶版もしくは品切れとなっており、書店等での入手が難しいのが現状です。

ここでは、千葉省三の代表的な作品を紹介します。

1. 郷土童話

自らが生まれ育った楡木（鹿沼市楡木町）を中心とした郷土を舞台にした作品です。自らの幼少年時代の体験を基に、方言を駆使して子どもたちの姿を生き生きと描き出し、リアリズム児童文学の先駆的作品と高く評価される省三文学の代表的な分野です。

「虎ちゃんの日記」（「童話」大正 14 年 9～10 月号掲載）

小学六年生の虎ちゃんの夏休みの生活を、主人公の日記の形式で描いた作品。舞台は楡木が中心で、この作品で初めて楡木の方言が使われました。友だちとの遊びや仲たがい、家出体験、東京からやって来た病身の子どものとの交流と別れなどが描かれています。郷土童話の代表的傑作で、昭和 14 年に毎日新聞事業部で映画化されています。



「鷹の巣とり」（「童話文学」昭和 3 年 7 月号掲載）

ダイシャクボウ（鹿沼市塩山町にある山の通称名）のぼたん杉に鷹の巣をとりに行く 5 人の子どもたちの姿を描いた作品です。杉の木の枝から落ちしてしまった仲間を心配する姿、無事に見つかった仲間に安堵する姿などがユーモラスに描かれています。昭和 50 年代に小学校の国語教科書に採用されました。

「乗合馬車」「高原の春」(「童話文学」昭和4年2月・3月号掲載)

「乗合馬車」は、今市から楡木へ馬車に乗って引っ越してきた自らの体験をモデルに描いた作品です。知らない街へ向かう不安な気持ちと、途中で出会った同級生になる「善ちゃん」との交流を描いています。「高原の春」はその続編で、「善ちゃん」が見つけた高原の「チョロチョロ金水」という湧水をみんなで見に行く話です。野鳥の声、野山の植物など自然の描写が美しい作品です。



「けんか」「井戸」(「童話文学」昭和4年5月・6月号掲載)

どちらも南押原高等小学校が舞台です。体は大きいが勉強が苦手な「丑^{うし}」が主人公の連作で、「けんか」は、上級生にいじめられていた丑が反撃してけんかで上級生を打ち負かす話。「井戸」は、学校の井戸の中に落ちている異物を確認するために、無理やり井戸の中に入らされた丑が、皆を見返す話です。

「仁兵衛学校」(「童話文学」昭和4年8月号掲載)

移転前の南押原高等小学校を舞台に、老教師と腕白な教え子たちの交流を描いた作品です。「青葉しげれる桜井の…」の唱歌が効果的に使われています。

「みち」「シオンベン稲荷」

(「児童文学」昭和10年11月号・昭和11年10月号掲載)

楡木宿の街道の裏手にある竹やぶの中を探検する子どもたちの姿を描いた連作です。宿の子どもたちの遊ぶ姿を描いた作品として、ほかに「芝居ごっこ」(「童話」大正15年3月号掲載)などの作品もあります。

「梅漬けの皿」(「童話」大正14年12月号掲載)

省三の祖母の実家(宇都宮市宝木町)が舞台。主人公の少女は、省三の母の少女時代がモデルです。

「つけひげ」(「童話」大正15年3月号掲載)

楡木宿の子どもたちが、三日月神社(鹿沼市上殿町に現存する)の縁日へ遊びに行く話です。こづかいが少ない主人公と弟は、省三兄弟がモデルと思われる。

2. 創作童話

郷土童話のような特定のモデルを持たない純粋な創作読み物。

「機関車と月の話」(「童話」大正10年5月号掲載)

自分が一番早いと思っている蒸気機関車が、月を追い抜こうとスピードを出しすぎて脱線してしまう話です。教訓的な内容ですが、説教臭さはあまり感じず、走る機関車や情景の描写が優れています。

「五右衛門風」(「童話」大正11年5月号掲載)

役に立たない変なものを次々に作り出し、村の人たちから好機のみで見られている五右衛門が、自分の発明した高速自動車(のようなもの)に乗って走っているうちにいつしか姿が消えて風になってしまうお話です。SF的な展開がユニークです。

「どろぼうとラッパ」(「童話文学」昭和3年7月号掲載)

ある家に盗みに入ったどろぼうが、盗んだ箱の中のラッパを吹いているうちに、子供のころを思い出して気持ちが浄化されていく話です。

3. 幼年童話

幼い子ども向けの童話。郷土童話と並んで省三の得意とする分野です。

「ワンワンものがたり」(「童話」大正12年4・5・7月号掲載ほか)

省三が長男の光太郎にせがまれて話して聞かせた「ワンワン」と「パパ」と「ぼうや」のお話です。「たばこをすったワンワン」「しっぽのないワンワン」「おつきさんをたべたはなし」など12編の連作で、単行本化された時に「わんわんものがたり」と改題されました。パパの視点で擬人化されたワンワンのこっけいな様子がユーモラスに描かれています。



「チックタック」(「良友」大正12年8月号掲載)



おじさんの家の柱時計の「チック」と「タック」が、おじさんが寝静まった頃に時計から抜け出し、お寿司を盗み食いしたが、ワサビの辛さで時計の音も「ジグダグ」になってしまうというお話です。昭和40年代に「チックとタック」に改題されて、小学校1年生の国語教科書に採用されました。

4. 大衆児童文学

講談社の「少女倶楽部」に連載された長編読み物が代表的で、後に単行本化された作品も多くあります。内容は時代物が多く、「童話」「良友」などに発表した短編作品もあります。

「陸奥の嵐」(「少女倶楽部」昭和7年1～12月号連載)

ジュール・ベルヌの「皇帝の密使」の翻案、舞台と登場人物を日本に置き換えて作品化しています。後に大川橋蔵主演で東映が映画化しました。

「少女倶楽部」には、この作品に続いて「海の隼」「千鳥笛」「山姫かづら」「泣かぬ星丸」「勤皇兄弟」が連載されました。



5. 再話(翻案)

海外や日本の古典や民話を基に、子ども向けに書き直した作品。

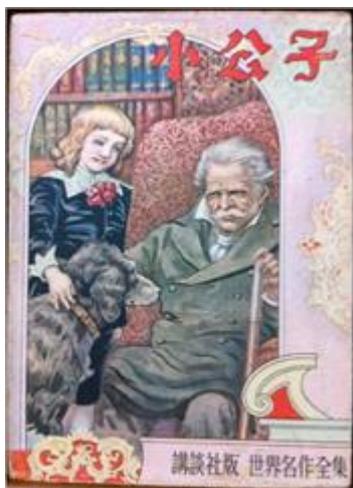
「無人島漂流記」(「童話」大正15年4～6月号掲載)

日向の国(宮崎県)の実録漂流記をまとめ直した作品です。

「名馬磨墨^{するすみ}」(「少女倶楽部」昭和13年2月号掲載)

源平合戦の宇治川の先陣争いで梶原景季が乗ったと言われる名馬磨墨^{ひきた}は、鹿沼市引田で育てたという伝説があり、それを基に書かれた作品です。

このほか外国作品の翻案として、「ニルスのぼうけん」「小公子」「ロビンフッドの冒険」「西遊記物語」などがあります。



6. 講談社の絵本

昭和11年(1936)12月に講談社(当時は「大日本雄弁会講談社」)が創刊した絵本シリーズです。「幼年倶楽部」より幼い読者層を対象にし、当時一流の



挿絵画家と児童文学作家を起用した豪華な絵本でした。昭和 17 年（1942）4 月に終刊後、「コドモエバナシ」と改題して昭和 19 年（1944）3 月まで続けました。戦後昭和 20 年（1945）10 月「講談社の絵本」として復刊、21 年 2 月に「コドモエバナシ」と改題し昭和 33 年（1958）9 月まで刊行され、累計出版数 7 千万部を誇りました。

省三は昭和 12 年（1937）から刊行に関わり、「金太郎」（13 号）、「孝女白菊」（32 号）、「二宮金次郎」（85 号）、「安寿姫と厨子王丸」（94 号）など 50 点以上を執筆しています。

7. 千葉県三童話全集

昭和 42 年（1967）に岩崎書店から刊行された全 6 巻の全集です。各巻の内容は以下の通りです。

- 1 「五右衛門風・少年のころ」：雑誌『童話』に大正 9～15 年に発表された初期作品、省三の自伝「父母の記」および関英雄による解説「生い立ちから雑誌編集者時代まで」を収録。
- 2 「トテ馬車・竹やぶ」：第 1 童話集「トテ馬車」（昭和 4 年刊）、第 4 童話集「竹やぶ」（昭和 13 年刊）を完全収録、ほかに省三の随筆 9 編と奈街三郎による解説「同人雑誌時代 - 千葉さんの童話文学」を収録。
- 3 「ねぎ坊主・じぞうさま」：第 2 童話集「葱坊主」、第 3 童話集『地藏さま』（昭和 7 年刊）を完全収録、ほかに古田足日による「千葉県三再評価の歩み」と関英雄による解説『童話文学』発刊以後」を収録。
- 4 「ワンワンものがたり」：幼年童話の代表作「ワンワンものがたり」シリーズや、「チックタック」「おさるのしくじり」など幼年童話の代表作を収録、川上四郎による「千葉君と私」、酒井朝彦による解説『童話文学』をめぐっての偶感」を収録。
- 5 「陸奥の嵐」：大衆長編児童文学の処女作である「陸奥の嵐」を完全収録、他に管忠道による「大衆児童文学史における千葉県三（一）」および千葉県三年譜を収録。
- 6 「無人島漂流記」：再話や創作童話作品を収録、他に省三の自伝「続・父母の記」および管忠道による「大衆児童文学史における千葉県三（二）」および研究資料として宇都宮中学校『同窓会雑誌』に掲載された省三作品、省三全作品目録を収録。



なお、同全集は昭和 56 年（1981）に新装版として再刊行され、その際、各巻名が以下のように一部変更されています。（内容の変更はありません）

- 1 「ばけねこたいじ・五右衛門風」
- 2 「鷹の巣とり・虎ちゃんの日記」
- 3 「おばけばなし・仁兵衛学校」
- 4 「ワンワンものがたり・チックタック」
- 5 「陸奥のあらし」
- 6 「無人島漂流記」

同全集も現在は絶版で入手が困難になっています。復刻が待たれるところです。

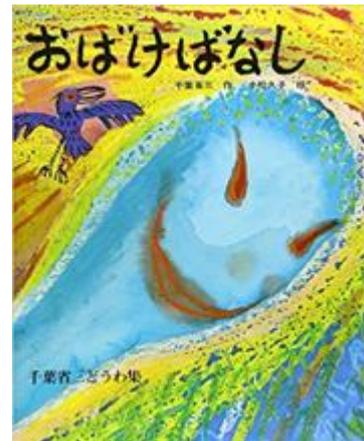
8. 現在入手可能な著作

現在書店等で入手可能な千葉県三作品は、以下の通りです。

『おばけばなし』文研出版 昭和 47 年 2 月発行

※収録作品

- ・おばけばなし
- ・幸平じいさんと馬車
- ・赤い木の実
- ・機関車と月のはなし
- ・仁兵衛学校



『ワンワンものがたり』日本図書センター
平成 18 年発行（わくわく名作童話館 5）
※昭和 4 年刊行の「ワンワンものがたり」の復刻
改定版です。